

原発事故 伝え方検証

放射能漏れが続く東京電力福島第一原発。政府や東電は、事故処理について記者会見を開き、さまざまな数値を公表する。メディアもそれを報じているが、地域住民をはじめ世界の人々に「必要な情報」を提供しているだろうか。住民の避難指示を決定する放射線量や、放射能汚染水の放出量などを断片的に聞いても、分かりにくいとの指摘もある。三者が伝えるべき情報とは一。(小国智宏、篠ヶ瀬祐司)

官房長官、保安院、東電…

芥川賞作家で福聚寺住職の玄侑宗久さん(五巴)が、住む福島県三春町は、原発から西約四十五キロにある。日本三大桜の一つ、ベニシダレザクラの巨木「三春滝桜」の開花季節。例年なら春めいた雰囲気が漂うのに、住民は原発事故の脅威におびえ、情報不足をひしひしと感じているという。

隠されると 疑心暗鬼に

「原発事故の情報は誰に集約されているのか。ある国会議員に聞いたら、海江田万里経済産業相だというのが、表に出てこない。枝野幸男官房長官、原子力安全・保安院、東京電力の三者がばらばらに発表している。どれを信用すべきかが分からない。すべての情報を一元化してくれば、混乱しなくてすむ」

玄侑さんは、情報を隠されると疑心暗鬼を生む加えずにそのまま出しているが最近まで公表されなかった。その理由は「文科省の拡散予測を政府は正式なものとしており、違う情報を出す」と混乱すると考えたという。そんなものは文科省と気象庁の間で横の連携をとればよいだけのことで

解釈加えずデータ出して

「発表されているのは、数多い調査地点の中で突出した値が出た地点だけ。その他の問題のない多くの地点については広く発表しなかった。県の出したリートの詳細を報道しなかったメディアの責任もあるだろう」と手厳しい。



避難指示区域で、防護服を着て放射線量を計測する福島県警の警察官。4日、福島県南相馬市で(同県警提供)

放射能漏れが止まらない。安全神話は作り物だった。このまま何年もたらたら漏れ続けた場合、日本や世界の汚染はどこまで進むのだろうか。誰もが不安になって当然だが、それを解消するには正確な情報の開示しかない。国際社会も日本の対応を注視している。いまこそすべてをオープンにしよう。(立)

レスクメモ

機械的に区切るのもやむを得ない。その後の避難行動では、地元行政と緊密に連携し、コミュニケーションを断しないような判断をしてほしい。そうしないと若い人は避難して、年寄りや残るといような家族の分断まで招いてしまう」といいます。玄侑さんは「住民は目に見えない放射線という観念的なものに恐怖を抱いている。精神的なストレスから具合が悪くなる人も出ている。御用学者でもない、反原発学者でもない、公平中立な意見を知られたがっている。メディアはそういう情報を発信してほしい」と注文する。

情報一元化して公表を